子の安全 夏に願う

一字一筆　静岡の今

梅雨空が続いているが、二十四節気の大暑（今年は23日）は一年で最も暑いころとされ、比較的安定した天気が続く7月下旬は格好の夏山シーズンでもある。

富士山の静岡県側の3登山口も10日に「開山」、併せて1292人（静岡県発表）が山頂で令和初のご来光を迎えた。前年同日に比べ178人多く「令和元年」という節目の夏山シーズンに、富士山頂を目指す登山者が増えそうだ。

今夏の富士登山道は山頂付近の石積みの崩落があり、安全確保が心配されたが、下界では今、子どもたちの「通学路」の安全を確保する対策が自治体や警察の喫緊の課題になっている。川崎市で5月、スクールバスを待つ児童ら19人が切り付けられ2人が死亡した事件や、高齢ドライバーによる交通事故の被害が各地で発生しているためだ。

もはや子どもたちの安全対策を学校や地域の父母たちに委ねることは限界だとして、県議会各派が川勝平太知事に異例の「子どもの安全対策」強化を申し入れた。このため6月県議会では約2億5千万円の補正予算が安全対策に充てられることになり、特別支援学校スクールバスへのドライブレコーダー新設や通学路上へ可動式防犯カメラ導入が始まった。夏の交通安全県民運動（7月11～20日）で小嶋典明県警本部長は「横断歩道や生活道路を中心とした取り締まりの強化」を指示、土屋優行副知事も子どもの安全対策に「オール静岡で取り組む」と宣言した。

子どもたちの安全を脅かすのは交通事故や無差別の「狂気」ばかりではない。県によれば2018年度の県内の児童虐待相談件数は2911件で、過去最多を記録した。

交通事故とは無縁の通学路もある。のどかな水田地帯にある伊豆の国市立大仁小学校の通学路。学校に急ぐ子どもたちを富士山が優しく見守っていた。もうすぐ夏休みである。

（前静岡県監査委員・富永久雄）

富士山が見守る通学路＝伊豆の国市、全日写連・遠藤啓さん撮影